だいたい月刊
4月号
萌木の村
新聞
MOEGINOMURA SHINBUN
Vol.1

目指すは、清里の原風景

清里山野草ガーデン ただいま造園中！

萌木の村では今、広場をはじめとしたあらゆる空間を大改造中だ。この改造計画のために舩木上次社長が召集したのは手仕事の匠３人。草、木、石の匠が作り出す新しい萌木の村が徐々に姿を見せ始めた。

舩木上次は憂えていた。どうすればあの美しかった清里の景観を取り戻すことが出来るかと。道を歩けば、そこかしこに整然と組まれた石積みが見受けられ、石に包み込まれた土地には高地特有の可憐な草花が咲き乱れる。丸太組みの質素な家々も草木に溶け込んで美しい景色のアクセントとなる。そこにあるものは八ヶ岳にもともとあるものだけだった。

ある日、舩木は八ヶ岳在住の英国人ガーデンデザイナー、ポール・スミザーと出逢う。ポールは言った。「本来のイングリッシュガーデンとは、その土地にある草花や木や石を生かし、その土地らしさを大切に作るもの。気候と土壌に会った植物には、肥料もいらないから手間ひまもかからない。イギリスで見た庭が美しかったからといって、その庭で使われているものを持ってきて真似しても だめ。美しいからといって土地に合わない植栽をすると、お金も時間もすごくかかる。」舩木は今までの庭造りの間違いを思い知らされた。そして決意する。ポール・スミザーという得体の知れない外人に萌木の村の環境整備を全面的に任せることを。

この石積みは萌木の村全体に広がっていく。この場所にはテラスやパーゴラ、遊歩道が設置され、5月下旬からはポールの植栽が始まる。

ポール・スミザー：いたって陽気でおしゃべり好きな英国人は、ゴージャスに着飾った庭が大嫌いである。

草と木と石と、意思で手づくりの庭は生まれる。

言わずと知れたスーパーマン舩木上次。

ポール・ラッシュ先生の遺志を受け継ぐ舩木とポール・スミザー。二人のポールによる庭造りが始まったのは、２０１２年初夏のことだった。舩木の理想とする清里の景観には石積みが欠かせない。コンクリートで固めた石組みなどもってのほかだ。誰に任せよう。白羽の矢が立ったのは輿水章一。舩木の幼馴染である輿水は石組みのプロではない。土木工事のプロだ。自分の現場では、石のプロを雇っていた。石積みの経験はなくとも監督をした経験はある。だからこそ今までにない良い表情を持った石積みが出来るのではないか。予想は的中した。整然としすぎず、かといって素人芸でもない素晴らしい石組みが、組みあがった。

ポールのデザインでは、三段に積み上がった石組みの真ん中の段に、山葡萄の這うパーゴラがある。ポール自身はその構造体について思い入れはなかったが、積み上がった石組みを眺めるうちに欲が出る。間伐した村の木を使って、今まで見たこともないようなパーゴラが作れないものか。舩木に心当たりがあった。大工、雨宮国広。十数年前、できる大工として仕事をこなしていた雨宮は一軒の古民家と出逢う。大月にある重要文化財「星野家」だ。その家は手道具だけで作られていた。斧で削った柱や梁に魅せられた雨宮は、電動工具を捨てる。以来、斧一本で家を建てることに熱中する。今ではその第一人者となった。日本ではさして有名ではない。世界では超有名人だ。今、雨宮は斧一本で栗の大木をひたすら削っている。はてさて、どんなパーゴラが出現することだろう。

萌木の村に役者は揃った。自然を愛し、それを生かす確固たる「意思」を持った男たちが挑戦する、まさに手づくりの庭だ。ポールによると完成には少なくとも五年はかかるという。どんな庭が出現するのか、見逃す手はない。（つづく）

雨宮国広：五感をすべて使って楽しまないと人間は退化すると言う彼は、石斧同様に、まさに生きるシーラカンスだ。

輿水章一：涼しげな目元がポール・ニューマンに似ているらしい。舩木の信頼も厚い萌木の村の管理人でもある。

DO YOUR BEST AND IT MUST BE FIRST CLASS — PAUL RUSCH —
KIYOSATO MOEGINOMURA
萌木の村

発行：萌木の村
〒407-0301
山梨県北杜市高根町清里 3545
tel.0551-48-3522
fax.0551-48-3500

Editorial:Nakajimagumi
Text:Hironori Nakajima
Photo&Illust:Masayuki Kobayashi
Design:Kikuno Shimizu

ポール・スミザーが植えました。清里山野草ガーデン

植物大図鑑

「このエリアには土は要りません。砂利を敷いてください」？？？砂利で植物が育つのか！「八ヶ岳の頂上付近に土はない。でもちゃんと花は咲く」ふむふむ納得。ポール・スミザーが言うには、肥えた土だと雑草もはびこり手入れが大変だそうだ。手間をおさえてキレイな庭。素晴らしいガーデンデザイナーである。八ヶ岳にもともとある山野草を中心に、この地ならではの庭づくりが始まった。

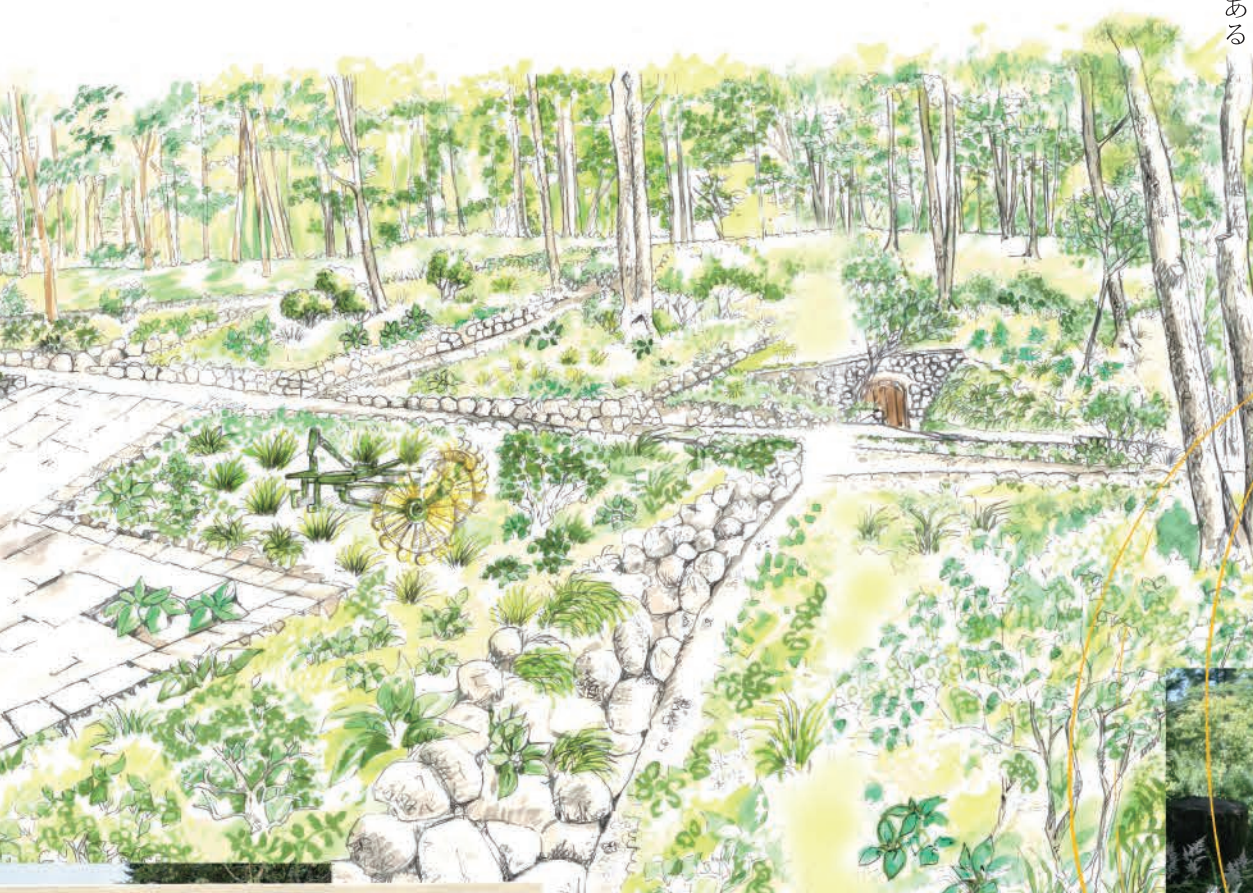
ジャーマンアイリス
ドイツアヤメをもとに多くの種を交配させたアイリス。ポールが萌木の村で謎の品種を発見。株分けして石段の一番上、砂利エリアに植えます。

キキョウ
播いたその年に開花する多年草。細いストライプの入った淡いブルーの花を咲かせます。

トモエソウ
丘陵から山地に生え、高さは１ｍほどになります。やせた土地であちらこちらに点々と咲きます。

オミナエシ
秋の七草のひとつです。８月から１０月ごろ、黄色い花を咲かせます。「あわばな（粟花）」とも呼ばれます。

コウリンタンポポ
６月から８月ごろ、紅色やオレンジ色の花を咲かせます。清里の植物ではありませんが、萌木の村に自生していました。



おひさま大好きな山野草たち

ハマナス
海辺のやせた砂地で育つ山野草。四季咲きで花と同時に実も見ることができます。実は食べることができます。

オニシモツケソウ
高山の日当たりのよい湿った草地や渓流沿いに生える山野草。６月から９月ごろ、白色の小さな花を咲かせます。

チカラシバ
イネ科の山野草で、夏から秋にかけて力強い尻尾のような穂を立てます。野性的ながら庭を落ち着かせる役目を持ちます。

サザンハイブッシュブルーベリー
ツツジ科スノキ属の落葉小低木で、高さは１～1.5mになります。フロリダなどの暖地でも生育するブルーベリーです。

ウズアジサイ
５月から７月ごろ、ピンク色から淡い青紫色の花を咲かせます。萌木の村に植えられていた株を木陰に移植しました。

砂利でもへっちゃらな山野草たち

チャイブ
ユリ科ネギ属の多年草です。サラダに入れるととってもおいしい。清里山野草ガーデンには食べられる植物がいっぱいです。

コマツナギ
小さな淡い紅紫色の花を咲かせます。根が地中に深く入って、駒（うま）を繋げられるほど丈夫だというところから名づけられました。

アサギリソウ
青みがかったやわらかい葉がこんもりと茂り、朝露をのせて輝きます。

ノアザミ
キク科アザミ属の多年草。一度花壇に植えると、こぼれ種であちこちに咲いてくれます。ちょうちょも大好きな山野草です。

ミヤマオダマキ
高山の岩のすきまや草むらなどに自生します。5～6月に、あざやかな紫色の大型の花を下向きに咲かせます。

カライトソウ
7月から9月ごろ、ピンク色の花を咲かせます。青色の葉っぱが美しい山野草。たくさん葉を出すので雑草をおさえてくれます。

ソバナ
花色は青紫で長い花穂に下から咲きあがっていきます。石積みの石と石の間に植え込みます。

日陰にひそやかに暮らす山野草たち

フウチソウ
イネ科の植物でコンモリと生えます。弱い風でもユラユラと揺れる様子は「風知草」という名前にピッタリです。

アマドコロ
4月から5月ごろ、白色の筒状の花を1～2個下垂して咲かせます。シダとギボウシといっしょに木陰に植えます。

ギボウシ
存在感のある葉っぱが特長的な山野草です。萌木の村には八ヶ岳固有の品種の他、様々な葉をもつ園芸品種も植えられていました。それらを生かし植え直しを進めています。

クサソテツ
林や渓流沿いに群生します。「こごみ」とか「こごめ」とか呼ばれ、古くから食用に利用されてきた山野草です。

© GARDEN ROOMS

手づくりの庭に欠かせない匠の技

斧一本で家を建てる匠、石と語り合いながら強固に石を積む匠、それぞれの技をシリーズで紹介しよう。

斧一本で家は建つ　木の技　Vol.1

木を伐る。それは命をいただくこと。感謝の念をこめて祈る。

雨宮国広に手道具大工の師匠はいない。古い建物の刻み跡を見ながら、当時の作業風景を思い浮かべる。そして試行錯誤する。自分で作った石斧や鉄斧を振るってみる。こうじゃないな、きっとこうだな。もしかしたら当時の使い方とちがうかもしれない。でも彼の振るう手道具から生まれる建材たちは美しい。

作業スピードだけを考えてみる。チェンソーを使えば一分で倒せる木なら、石斧だと四百分。鉄斧は二百分。まったく非効率である。でも彼は手作業にこだわる。仕上がりが美しすぎるからだ。

「はつる、というんですが、木を削って平らな面を作ることです。製材ですね。最初のころは斧を数回振るだけで息が上がる。今でもものすごく疲れる。でも疲れることが重要なのです。休んでいる時に周りの自然を感じることができます。鳥の声、木のざわめき、風…自然と一体になって作業をすると、あるリズムが生まれてくる。たまらなく心地いいリズムがね」

手道具の数々。いちばん手前の石斧が、道具の原点だという。伐倒から製材、刻みまでこなす万能道具。

鉄斧を使って、はつる。削るというよりも剥ぎ取るという表現に近い作業だ。

石斧で木を伐る。花が開くような切り口だ。

木屑もやさしい。ふわふわ柔らかく手にも刺さらない。

石には顔がある　石の技　Vol.1

奥の石は良さげな顔を持つが控えに下がり勾配がない。積み難い。

大小さまざまな石を組み合わせる。精巧なパズルのようだ。

見よ、この美しき石組みを。石に、おまえはどこに積まれたい？語りかけながら形状を見る。「この石は顔がないから難しい…」興水章一がつぶやいた。石の顔ってなんだ。顔とは、石積みの表面に出てくる部分のことだ。広く平らな部分が望ましい。対して石積みの中に隠れてしまう部分を控えという。きれいな顔があっても積みにくい石がある。控えに問題がある。左の写真の手前のだ。左の写真の手前の石が積みやすい石だ。顔があり、かつ控えの角度が奥に向かって下がり勾配になっている。なぜ下がり勾配か。次の石を積むためだ。下がっていなければ手前に飛び出そうとして安定しない。ぐらぐらする。強固な石積みにならない。どうしようもない石の場合は割る。割って形を整える。巨大な石は細かく割る。積みやすい形になるように計算しながら割る。石の顔は一朝一夕で見つけられるような生やさしいものではない。石と語り合えるようになってはじめて見つけることが出来る。

積む。石は重い。無理をすると腰を痛める。明日にさしつかえる。よって重機で吊る。

石をもむ。割りたいところに沿って、ドリルで穴を開ける。（右上）

矢を入れる。開けた穴に楔の役目をする矢を差し込んでいく。（上）

割る。数本の矢を大ハンマーで叩く。一本一本均等に。思い通りに割れると快感。（右）

ごめんなさい！　清里山野草ガーデン造園中

萌木の村はただ今、庭を大改造中です。手がけるのは英国人ガーデナー、ポール･スミザー。
清里に自生する山野草を、清里の土壌と気候にあわせて生かしきるナチュラルガーデンです。
手間ひまかけた原色のゴージャスな庭も美しいけれど、人工的な匂いがしませんか？
つくろうとしている庭は「ありのままの自然」。草も木も石も土も、ぜんぶ清里のものを使います。
とてもシンプルです。八ヶ岳の山野草に囲まれた石畳の小広場には、パーゴラの休憩場所と、
開拓の役目を終えたレトロなトラクタ。ゆっくりと時間が流れる癒しの空間です。
急ピッチで造園中です。汚かったりうるさかったりしますが、しばしご辛抱ください。
萌木の村の住民を代表して、わたくしリスがお詫び申し上げます。